

## 日本語動詞「見る」の機能動詞化による自動詞性の獲得

高橋 暦

名古屋大学大学院国際言語文化研究科

kym\_tkhs@yahoo.co.jp

### 1. 本研究の概要—動詞「見る」の自動詞性

動詞の自他の分類は、従来主に(I)形式的規定(ヲ格目的語の有無)、(II)意味的規定(主格から客体への働きかけの有無)といった2種の方法によって行われてきた。しかし、動詞の中には、これらの指標にそぐわず、自他いずれにも分類しにくいものが多い。<sup>1</sup> 一般に他動詞に分類される動詞「見る」にもまた、自動詞性が指摘される用法がある。

(1) KEDO 理事会が、来月以後、重油の供給を停止することで一致をみたのは、・・

(2000/12/3 東京)

(2) 貸出金残高は六兆千九百億と、前年同期に比べ1%の増加を見た。

(2005/12/20 中日)

上記の「見る」は、先行名詞と結合して〈物事の実現・成立〉という意味を表す。また、上記以外にも、「～が合意・解決・進展・終結・減少を見る」などの名詞と共に現れる。使用は報道機関に限定され、日常会話で現れることはほとんどない。このような「見る」に自動詞性を指摘した先行研究には、村木(1991)、田中(1996)があるが、両研究とも各論考の中、ごく簡単に触れられるに留まるため、詳細な分析には至っていない。そこで、本研究では、動詞「見る」のこの特殊な用法に対象を限定して分析を行い、「見る」の自動詞性への根拠およびメカニズムを提示することを目的とする。具体的には、上記の「見る」は機能動詞として、AがBを「見る」といった語結合全体で〈物事の実現・成立〉という特定の意味を発現し、自動詞性を獲得するようになることを主張する。

### 2. 他動詞文の述語成分「見る」と語結合の構成要素「見る」

AがBを「見る」における「見る」には、1)他動詞文の述語成分、2)語結合の構成要素、という2つの機能が併存している。「見る」の自動詞性は、「見る」を1)として捉える場合に生じるが、その前提には、「見る」が、AがBを「見る」といった固定的語結合の単位で文中に現れること、すなわち機能動詞化するという条件がある。<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 仁田(1982)の「再帰動詞」、天野(1987)児玉(1989)の「状態変化主体の他動詞文」などが挙げられる。

<sup>2</sup> 村木(1991:203-230)は、実質的な意味を先行名詞に預けて自らは述語形式を形成するための文法形式を果たす役割を担う動詞を機能動詞と呼び、語単独で実質的な意味を持つ実質動詞と区別をしている。また、機能動詞により形成された語結合を機能動詞結合と呼び、慣用句に近い性質(1 構成要素の結びつきの不

- (3) a. KEDO 理事会が 一致を 見る。・・「見る」：(KEDO 理事会の一致が) 実現する  
 b. KEDO 理事会が 見る。 : (KEDO 理事会が何かしらを) 視覚で捉える
- (4) a. 貸出金残高が 増加を 見る。 : (貸出金残高の増加が) 実現する  
 b. 貸出金残高が 見る。 : (貸出金残高が何かしらを) 視覚で捉える

### 3. 「見る」の自動詞性の要因

本研究では、A が B を「見る」における「見る」の自動詞性は、語結合内部の要素 AB の意味役割および相互の意味関係性が、典型的他動詞とは大きく異なることに起因すると主張する。また、工藤(1990)が指摘する、1)典型的他動詞の主語－目的語には、〈働きかけ手－働きかけの受け手〉といった意味関係性が認められること、また、2)この意味関係により直接受動文が生成されるため、能動－受動対立は、典型的他動詞に近いほど活性化し、他動性の喪失の程度にあいまって、変容、消失するという2点について、A が B を「見る」が、いかに典型的他動詞から逸脱する特殊な他動詞文であるかを示し、「見る」の自動詞性の根拠として提示する。

#### 3.1 主語－目的語の意味役割と相互の意味関係性

A が B を「見る」における要素 A は〈要素 B の表す状態変化の実現領域〉を、要素 B は〈状態変化〉を表す。例えば、(5)における A が B を「見る」は、〈「解決」していない状態〉から〈「解決」した状態〉という要素 B の〈状態変化〉が、要素 A 「事件」という〈状態変化の実現領域〉において実現すること（「見る」）を意味している。

- (5)これで事件は発生から六日で解決をみることになった (1989/12/6 中日)

#### 3.2 直接受動文の生成可否

A は B を「見る」の主語－目的語は〈状態変化の実現領域－状態変化〉という極めて特殊な意味関係性を担うが、以下(6) (7)のように受動文も生成する。

- (6)価格問題で意見の一致が見られたことを明らかにした。 (1991/6/15 中日)  
 (7)昨年度は三学期と比較して十一十五時間の授業時間に増加が見られた。 (2004/9/15 中日)

上記の文は、要素 A が二格名詞に、要素 B がガ格名詞に、述語「見る」が能動から受動に交替する点で A は B を「見る」の受動文 B が(Aに)「見られる」であると考えられる。しかしながら、このとき「見る」は〈物事の実現・成立〉の意味ではなく、「見る」の受動形式「見られる」に特異な〈存

---

規則性 2 意味上の非分割性 3 形式上の固定性 4 単語性 5 既製品性) を持つと説明している。

在の確認)の意味で用いられる。<sup>3</sup>

(6´) 価格問題で意見の一致が見られたことを明らかにした。

a. 〈実現・成立する〉: ?価格問題で意見の一致が成立されたことを明らかにした。

b. 〈存在の確認〉: 価格問題で意見の一致が確認されたことを明らかにした。

(7´) 授業時間に増加が見られた。

a. 〈実現・成立する〉: ?授業時間に(よって) 増加が実現された。

b. 〈存在の確認〉: 授業時間に増加(傾向が)確認された。

能動-直接受動の対立は、1)構文的対応、2)意味特徴(一方から他方への働きかけ)、3)意味的対応により成立するものである(寺村(1982:214))。従って、(6)(7)のような文を、AがBを「見る」の直接受動文であるとは言いにくく、直接受動文の生成には変容が見られるという結論が導かれる。

なお、「見る」が〈物事の実現・成立〉の意味を弱める原因には、「見る」が機能動詞であることが考えられる。基本形態である能動形式 AがBを「見る」が、受動形式 Bが(Aに)「見られる」に変わることにより、語結合の秩序が乱され、その結果、語結合全体で発現していた意味が各構成要素の意味に分割されたということである。

#### 4. まとめと今後の課題

「直接受動文の生成可否」という観点から AがBを「見る」を考察した。この中では、能動-受動において意味的対応がなされないという点から、AがBを「見る」における直接受動文の生成には変容が見られるという結果を得た。また、このことを、当該構文の自動詞性の根拠として提示した。今後も、他動性の概念を中心に、より考察を深めて、動詞「見る」の自動詞性に対する統一的説明を目指したい。

#### 参考文献(抜粋)

村木新次郎(1991)『日本語動詞の諸相』ひつじ書房

田中聡子(1996)「動詞「みる」の多義構造」『言語研究』110(pp. 120-142) 日本言語学会

<sup>3</sup> 知覚動詞の受動形式について考察した志波(2006)の用語である。志波でもまた、「動詞が受身になることで経験者が背景化され、同時に述語が自動詞的になることで、ガ格に立つ実態の存在をあらわす文になる。」(p.10)といった知覚動詞の自動詞性を示唆する記述がある。

